

靴のデザインにみる戦後史 ④

文・イラスト 神奈川県企業博物館連絡会特別会員 福原 一郎

1970年代が幕をあげた昭和45年、大阪で日本初の万国博覧会が“人類の進歩と調和”をテーマに開催された。国際化は更に広まり民族意識も高まった。休日には歩行者天国が開かれ、カジュアル感覚でジュート巻の底をつけたフランスの民族的履物エスパドリーユ調の婦人靴が流行した。

'70年代に入って婦人のスカート丈は'60年代終りのミニスカートから一躍丈の長いマキシ・スカートに変化して、ヒールも高くなり踏着力に厚いプラットフォームが着けられた。

1971年（昭和46年）にはミディ・スカートやホットパンツなどが現われて多様な時代となり、1972年（昭和47年）ジーンズは中年や子供にも普及して、ジョギングシューズが街の中で履かれるようになった。1973年（昭和48年）男性が長髪で幅の広いネクタイにベルボトムのパンタロンをはき、プラットフォームのブーツや“男のハイヒール”も現れた。

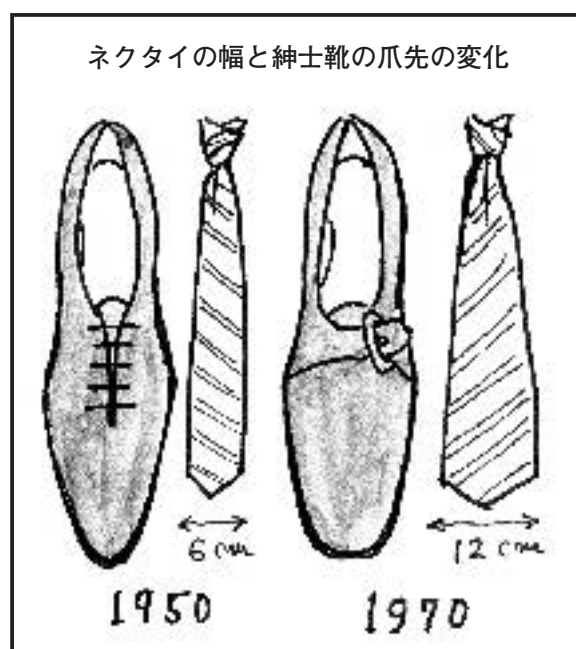
この時代は背広の襟幅も広くベルトも太い“ビッグなファッション”の流行で、靴の爪先も太くなった。

1974年（昭和49年）自然指向が叫ばれて、海外で若者たちが履いたアースシューズという踏着力より踵部の方が低い底の靴がつくられた。'70年代後半になるとワークブーツやワラビタイプのカジュアルブーツが履かれ、ビジネスマンは秋冬はスーツにドレスシューズを履いて通勤し、春夏にはブーツに代って革のメッシュシューズを履いた。1976年（昭和51年）戦後生まれが人口の半数を突破した。“ニュー・ファミリー”と

いわれる世代で生活意識も変化した。

都心から離れた場所に本格的なショッピングセンターが出現して、アパレルや雑貨、靴までコーディネートで販売されるようになった。フォーマルウェアも社交的な要素が望まれ、ニュー・フォーマルといわれてソフトエナメル革を用いたパーティー用の靴がつくられた。本物指向の金具付中ヒールの“ニュートラディショナル”のポンプスや、横浜元町を発信地とする“ハマトラ”といわれる房飾りのローヒール・スリッポンが女子学生やOLに人気があった。

1978年（昭和53年）婦人のロングブーツは下火となり、ハーフ・ブーツや、ショート・ブーツが流行した。アウトドア用にはモカシンのデッキシューズが若い男女に履かれた。'70年代の終わりには省エネルギーが提唱されるようになった。



1970—1979

'60年代末の
ミニ・スカートに
低いヒール。



'70年代初め
マキシ・スカートに
プラットフォームの
ハイヒール。



ジョギングシューズ



ジュート巻底のエスパドリユー

男のハイヒール



ワラビ・ブーツ



ワークブーツ



「ハマトラ」の
スリッポン



アースシューズ



デッキシューズ



ハーフブーツ



frank